

いないいないばあや

神沢利子作 平山英三画



913 いないいないばあや

神沢利子作

岩波書店 1978

240 p. 21 cm (岩波少年少女の本 45)

小学5,6年以上

岩波少年少女の本 45

■ いないいないばあや

定価 一三〇〇円

落丁本・乱丁本はお取替いたします

一九七八年十一月二十一日 第一刷発行 ©

作者 神沢利子

画 平山英三

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

緑川 亨

発行所 101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

電話〇三二六五二四二一 振替東京六二六四〇

本文印刷 株式会社精興社

製本 株式会社松岳社

表紙・箱印刷 錦印刷株式会社

日本音楽著作権協会承認第七八〇七五二〇号

「赤い靴」野口雨情作詞 「青葉茂れる松井の」落合直文作詞

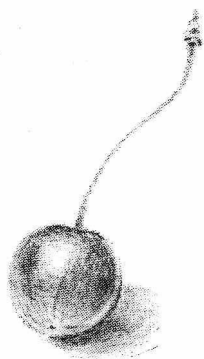
いないいないばあや

神沢利子作

平山英三画

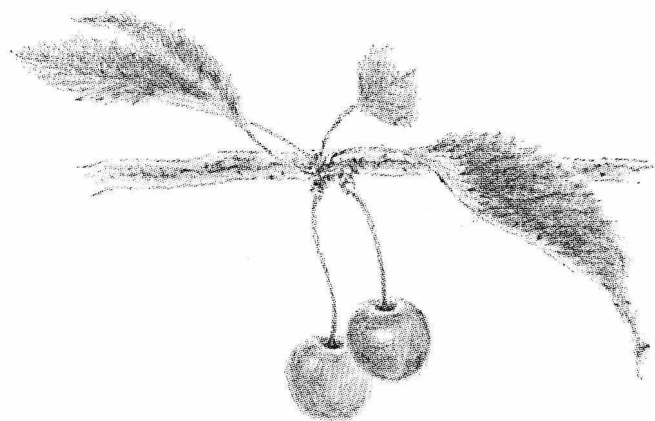
岩波書店

も
く
じ





熊 くま	109
たまご.....	97
青空と少年.....	85
りんごの木.....	67
あほう鳥とくじら.....	49
白いジャケツの男の子.....	36
馬鈴薯 ばれいしょ と目.....	22
いないいないばあや.....	9



あとがき	海	眠	青	桃	赤	ビー	ハン
が	の	ら	葉	の	い	玉	カ
き	たま	ない	茂	核	靴	の	チ
.....	ご	目	れる			骨	の
.....							ね
.....							ず
.....							み
.....							
235	221	207	189	175	156	142	128

い
な
い
い
な
い
ば
あ
や

平^{ひら} 神^{かん}
山^{やま} 沢^{ざわ}
英^{えい} 利^り
三^{ぞう} 子^こ
画 作

いないいないばあや

いないいない、ばあ！

いないいない、ばあ！

橙子^{とうこ}にこのあそびを教えたのは、多分^{たぶん}、橙子^{とうこ}がうまれる前から家にいたばあやだったろう。

六人兄弟の五番目にうまれた橙子^{とうこ}は、ばあやの手で育てられた。

ふたりのねえさんはだれからも、かわいいお嬢^{じょう}ちゃんとはめられるのに、末^{すえ}の橙子^{とうこ}はそんなことをいってもらったためしがない。

ものもらいができたり、おできができたりして、ばあやと病院に通^{かよ}う橙子^{とうこ}を、にいさんたちは「できもの屋敷^{やしき}」とからかった。縮^{ちぢ}れっ毛でかなつぽまなこの橙子^{とうこ}は、その時、ほんとうにかなしい化^{ばけ}物^{もの}みたいな顔をしていたのかもしれない。

だが、どういうわけか、ばあやは兄弟じゅうで橙子^{とうこ}が一番ごひいきだった。

いないいないばあや

あかんぼうの時から、ばあやは橙子^{とうこ}を相手に幾度^{いくど}このあそびをくり返したことだろう。いないないといと顔をかくし、ばあーとまた顔をだす。それだけのことなのに橙子^{とうこ}は声をあげてわらう。橙子^{とうこ}がわらい、ばあやがわらい、あきずにくり返すこのあそびに、いつ頃からだったろう、なんともしれぬもののけじみた恐怖^{きょうふ}の影^{かげ}がさしはじめたのは…。

「いないいないよう。そーら、嬢ちゃん、いないいないよう」

ごつごつと骨張^{はねば}った両手で顔をおおっただけで、ばあやはそこに坐^{すわ}っている。いつもの地味な木綿^{もめん}の着物^{ぎもの}にかっぽう着^{かっぽうぎ}というすがたで、ひざをついて坐^{すわ}っている。しらがまじりの束ねた髪^{かみ}もそうなら、短い指^{ゆび}のまんなかの節^{ふし}が梅ぼしをくつつけたみたいに皺^{しわ}よって、

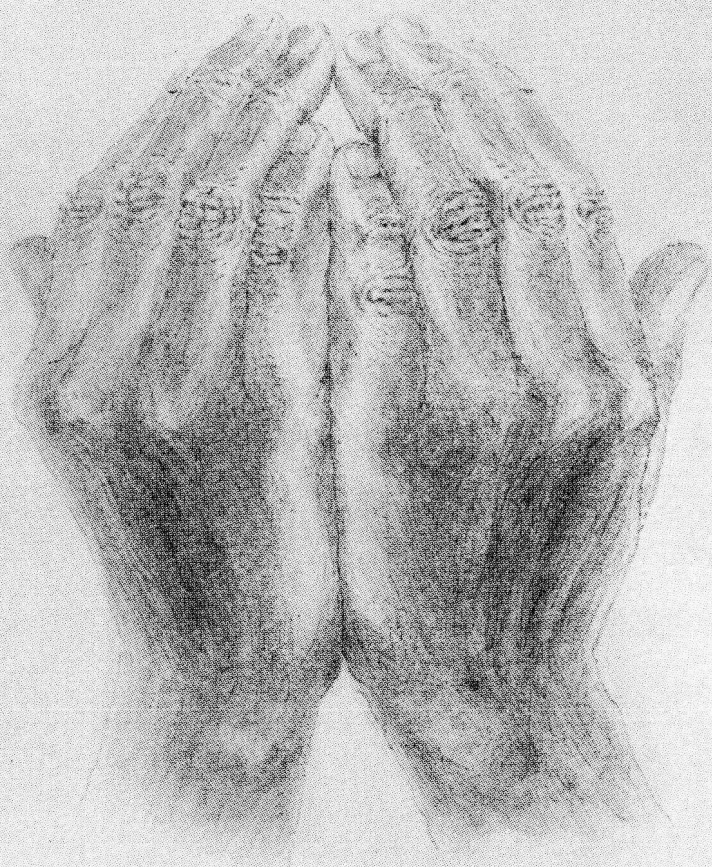
「梅ぼしちようだい。ひとつふたつみつ。ああ、すっぱい」

と、つまんであそぶ両の手も、たしかにいつものばあやの手に違^{ちが}いない。ここにいるのはたしかにばあやだ。

それなのに、いないないの唱^{とな}えことばがふしぎな呪文^{じゅもん}をかけるように、橙子^{とうこ}とばあやとふたりながら、ふいと、どこもしれぬ世界へさらわれていきそうな気がしてくる。

「いないいないないよう」

よう……となかくひっぱってばあやはよぶ。よびながら、ばあやはたしかにどこかへいってしまう。



ふたりを距てるのは、ばあやの顔をおおう屏風びやうぶみたいな両の手で。

その両手の向こうにしろない世界がひろがっているような……。橙子とうこはばあやを見つめる。

（うそっこよ、うそっこ。ばあやはそこにいるんだもの。ほら、今に顔を出す）

橙子とうこは緊張きんちやうし、胸むなが切きなくなってくる。

「いないいないよう」

いなくなるぞ、いなくなるぞ。もう、わたしはここにはいないぞという呪文じゆもんの後に続つづくのは、幼い不安ふあんを一挙いっきぎよに吹き飛ばす、あの「ばあ！」というひと声だ。

ほら、いた。やっぱり！

両手をはねのけ、おどけたさまに口をつぼめたばあやの顔が橙子とうこのわらいを待ちうけていて、こらえきれずにふたりはわらい出す。

（ほんと、いるじゃないの。なんにも変かわったことはありはしない）

なぜ、ふっと妙な気になったのか、橙子とうこはおかしくなる。ほんとに、あんまり当り前のことなのだもの。大丈夫だいじやうぶ。いつだって大丈夫だいじやうぶだった。いないいないとだましっこして、だまされっこして、あとはわらい声のうちにあそびは終るのだった。

そのようにいつも他愛たあいなくわらい合うふたりを見て、おもしろくないのは大きいにいさんだった。

にいさんにはきびしい癖、一も二もなく橙子をあまやかしてしまふばあやが憎らしいのだ。

「ばあや、ばあや」

にいさんは大声でばあやをよぶ。何用かとでてくるばあやに向かつて、にいさんはいう。

「いないいない、ばあ！ いないいない、ばあや。なんでもないよ。ぼくたち、いないいないばあをしてただけだもんなあ、欣二」

後の方は小さいにいさんにあごをしゃくって見せる。まっかになってばあやが追いかけて、にいさんは逃げながらさげぶ。

「いないいないばあや、くそばあや！」

そうして、ますます腹を立てたばあやにつかまるのは、張本人のにいさんではなく、おろおろ逃げ惑う小さいにいさんにきまっていた。

いないいないばあやとからかわれながら、ばあやは橙子とのあそびをいっこうやめようとはしなかった。

だが、その日、ばあやはいつもと様子が変っていた。

「いないいないよう。ほら、嬢ちゃん、いないいないよう」

両手で顔をふさいだまま、いつまでたってもその手はずそうとはしないのだ。橙子は焦れて、

「ばあ！ ばあや、ばあってば！」

いくらうながしても、ばあやはそれこそ石のように黙りこみ、動こうとしなかった。顔をふさいだばあやの両手は、橙子を拒み、すべてを拒んでいるように見えた。水仕事であかい手の甲の、うすい皮をまとった骨が鶏の足のように浮き出て、ところどころふくれあがった血管が、つるのようにからんでいる両手。

「ばあや、どうしたの」

たずねてもばあやはおし黙っている。

わらわらと風のようななかで橙子を背なかから包んでいき、顔をふさいだばあやの両手の裏側でなにやら恐しいことがはじまりそうな気がする。たった今、なにかがばあやを変えてゆく。そこにいるのはばあやではなく、お話にきく変化のもの、牙をむいた鬼婆かもしれない。

橙子は息がつまりそうになってくる。これ以上向き合っているのが怖くて、これはうそっこ。いつものだましっこなの。

「ばあや、ばあや」

夢中ではあやの指をこじあげようとするのに、頑としてばあやは指を閉じている。

顔さえ見たら、ばあやの顔さえたしかめたら、「ばあ！」のひと声ですべてが変るように、安堵し

てわらいだし、みんな元に戻るのだ。橙子はもう半泣きで力いっぱい、指をこじあける。と、なか指と人さし指のあいだから、ふいに目だまがのぞいた。檻のなかのけもののように、下瞼のめくれた目だまが、橙子を見返した。橙子はぎょっとし、めちやくちやにばあやの手をひっぱる。

「こりやどうしたん」

突然、ばあやの手から力が抜け、幕を切って落としたように、ばあやの顔があらわれた。

「とっこ嬢ちゃんのとよいこと」

ゆっくりと齒の欠けた口をあけてばあやがわらい、橙子は両のこぶしでその顔をうちながら、しゃくりあげた。

「こりやまあ、どうしたこっちゃ」

ばあやは大仰な身ぶりで声をあげる。

「なんで泣きよんの。ちゃんとばあやはおったでしようが。先刻からちゃんここにいったで」
そんなこといったって、そんなこといったって……。

のどがひくひくして、なみだが後から後から溢れてきた。

先刻まで黙っていたくせに。返事もしないで黙っていたくせに……。

「まあまあ、どうしよう。こりや本泣きじゃ。ごめん、ごめん」